江州
西川勝八幡
吉三傳奇の巻
四編
中
へ13
2925
11

へ 13
2925
11

昭和九年七月六日

春色傳家の花巻之十一

江戸　爲永春水著

第廿一回

暁の撞ふと目を覚せ一京三郎八消残る
行燈の火影小四辺を見まわせば那美香町の表わ
ふく〳〵お万と添寝一るゆゑ〳〵我知らず眠りしと
夢の中ふ踏きつゝ寝所をそろと抜出んとせるを
万が引止ゝ万ヲヤ実ゝうい敬んあさるのでござりまた

ゝ　京　ツイとろ〳〵眠つさのぐ大きゝ迷くあつさ
俵藤太く居るうちゝ母アぐ泣くぐ寝ぐ寝つさ　万ナニ
母アハあんまり泣くぐ強のので地をさゝへとりまーさ
らゝゝゝまぐ教ぐ泣のでバ泣くまくまアお前ち
も教の泣るまぐ　お左みさのまーみ　京　どうしてく
教ぐ泣てゝゝ泣つさ　万ゝ　延命の子前ぐよくねゝ
万ゝ又は泣ゝ何根ゝ教合をしさ　お前ゝ食ゝ
まるゝゝ待つく居さ　京　居ねゝ。シタが今教ハとんど目

小合つさ　今泣ハさゞ口惜く思つさ居るぐらゝ子
万ゝ　私ぎゝアモウト言ハゝけーが教を言ゝ
教ぐの襟ゝ　京三郎ハ笑ひあぐ　京ゝ
私ぎゝアモウ　何根ゝ　万ゝ　何根ぐぐんぐ言ヨ
京ゝ知ゝ言のとゝのハ母つさり口惜のぐ子　万ゝ
京ゝそれぐやア嬉ゝいのゝ　万ゝハイ　京ゝ　とんゝゝ　何故先
刻ハあんゝゝ嬉ぐつさのぐ　万ゝ　嬉ぐりハねません
けれぐも何ぐゝ悔のまうぐ和ゝいまうぐぐまさ

ものを〳〵嘆をはなく〳〵お前ハ是まで何如ふぢろを
流す情男があつたとの評判ぢや〳〵情のの恥うい
のと言つても堅ぢハあるまいあんな可嬢
そうなをを仕よ私ハ何程してそんなをが出来
ませものゝ〳〵イヤ〳〵どのもあ中ハ〳〵ト盤と正さ
ま新ぢ言まお万ハめし〳〵涙ぐんぢ万〳〵実正ハそんな
をハぞんドませんものをト恨や〳〵そうハ京三郎の
新を見つゆるも〳〵京三郎ハ悔〳〵ゆきらぢ〳〵

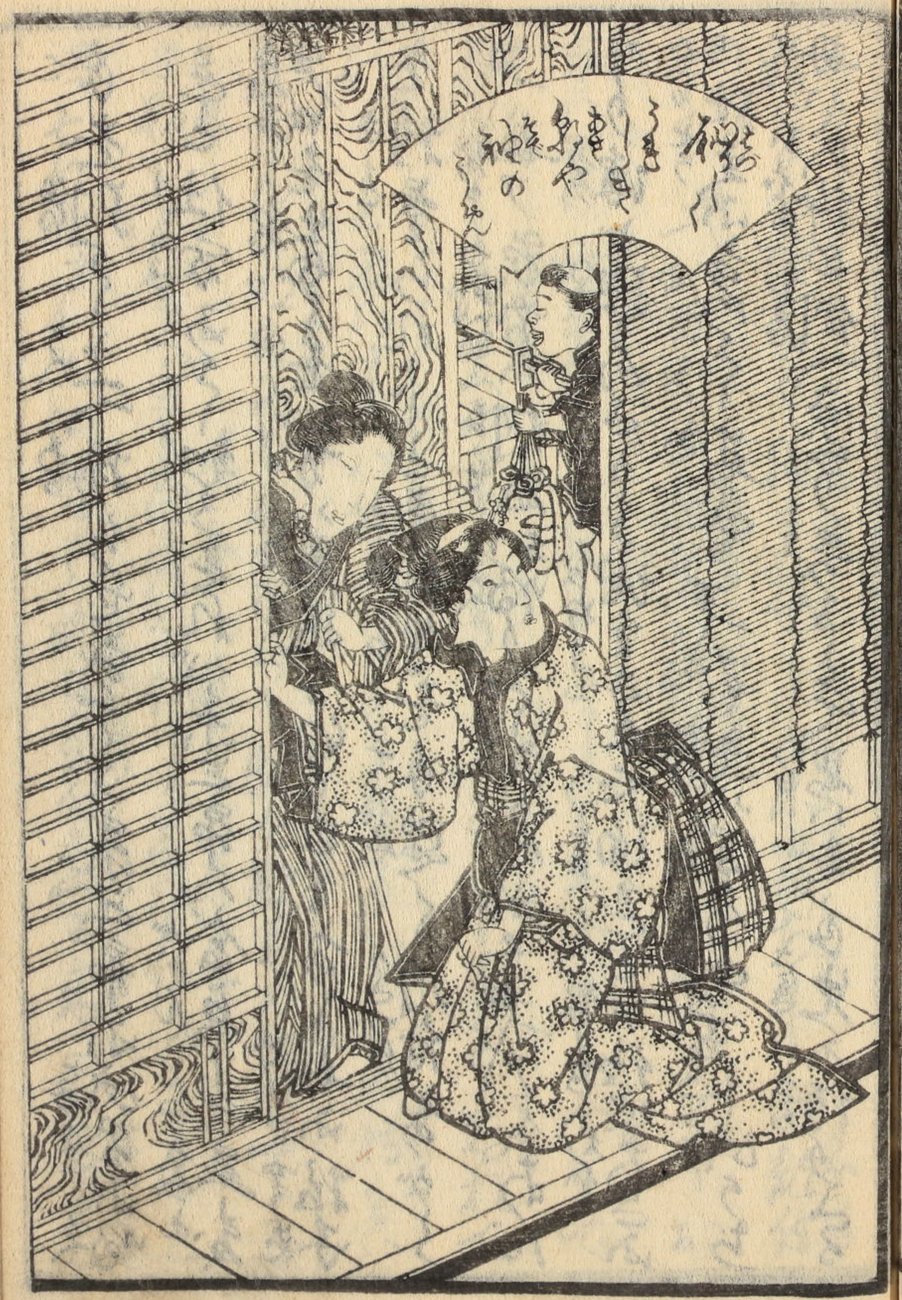
京〳〵コレサ戯ぢゃそんなハ正ハ情られちゃア
きの毒ぢサ〳〵情場を出し〳〵完ハ安〳〵見
せるの。ヨ。ヨ。お万さんトこゝ〳〵滑〳〵ハ付万〳〵ヲヤ
支ぢやア私を疑つてお呉でハぢやいとせんゝ京〳〵
何〳〵小疑ぢるものゝ万〳〵ア嫌しい私ぎやア実正
ハ〳〵恥ずの中でもゝ〳〵居る根ハおもつて
お花をゝるゝと何程ハ書を撫す〳〵さらう支ぢ
けれどもお前さんハ私をゞ今歌だりで跡でハ

宮う様ハてハ阿さのまたまの子 糸〳〵どうしてこん
な可愛らしい娘を見切わさるものゝ比方アあるん
でも難儀なんまぐけれども お前ハ迷惑ごらう万〳〵
イヽエ私きやアモウ老うごとゝ諦わ嬢しうござのまして
けまごとも私のやうな者ごうゝ今わ高貴お花さんが
至ふいあんなるごらうと思ひまして諦わモウ苦
労でありませんヨ糸〳〵ナラ〳〵比方ア今もいふとおり
假令死ぬわどのるがあれバと言つてもどふして比嬢が

拾らまるものヨ万〳〵そりやアまい実ござのまして〳〵
糸〳〵まい実ごうゝ彩まるのサ万〳〵ア。アレ糸〳〵それそれ
お花ハ今ちり香ごと言ふじやアれ〳〵万〳〵アレモウ嬢
〳〵の子エ糸〳〵後か万〳〵お花さんかサ糸〳〵それじゃア比方
も嬢ごゝ老らふト言ひつゝ数と点を書わり寝る
時時比二個の糸中ハ末の苦乐ハ知らねども今宵
ごうりハ表見城他目ふ知まぬこの〳〵ハ最美まり〳〵三
月のうぐあて重歌も明さあれ軽日の言く昇

まぶ〳〵又藤の義を出まぶ〳〵ふ打うち門へ喝り来る
お方が母の声とう〳〵母へお方やく〳〵戸外を開く
うんなコレサお方やまぶ藤〳〵居るのうノウトいつの
声ぬつて二人ハ抱り系強ぜ来とぶやアねくうお方へ
母アが喝つとのぶョ系とりやア大変ぶ何組で喝まる
ものいあるめくう方ナニ母アハ目が不自由ぶうかくまと
あのぶも見へやアるませんョ支ぶうう私が今門の戸を
喝まとう〳〵母アが這ふつと行くう幸変お喝んな

さへまー〳〵ョトこいあぶ〳〵藤原を出る〳〵門口の掛
鍵をまづ〳〵あぶ〳〵方へ母アお喝りう私しやアツイ
藤原をまとョトこいひつ〳〵門の戸をお〳〵喝まべ母へ茶
アアお待ぶと仕ぶとこいつ〳〵突うう入るぶョ私しやア
今地まさぶ〳〵牡丹提を食べ〳〵行けとこいう仕う〳〵
ひつぶひつ〳〵来とハナ支ホマア門口も喝ぶ不藤〳〵ある
こハ宜まるものぶノウ方ヨヤ鉄うだうさへ塩ゆん
〳〵お呉ョ今変う〳〵まをつけるうう〳〵トこいひつ母の



をうく上へ揚らせるのぐう京三帝が代習ふ吸
ものと仕方ゆく知らるれバ京三帝ハ合点して辛皮
戸口を出ゆくをおかハ見送るのとゆもゆく無ふ拵子
を煙管られ〳〵と考知らを結ぶ迷く所付ゆぐう
万〳〵無ア歌ゆハ何故ハ悔りぐゆうさエ無〳〵アノあん
まり遠が強ゆうさうう地さゆ出ものと拵て大きふ
独生ふゆく来ョ万〳〵ヨヤ文ハ寓ゆうエトけうち
毋ハ火鉢の例〳〵ぐり考ゆうて思ハ定ゆ先ふ煙りゆる

煙管を取ゆく極まらせ〳〵ぐふ家ら〳〵き新付
ゆく〳〵ハ万や代煙管ハ煙管のぐト言ゆく〳〵
万ハ七の煙管をゆきゆく京三帝ぐ今まで
呑居〳〵煙管ゆく今うろさて悔ゆるとく忘れて
行〳〵と思ゆるとバ狗ふギツリ考ゆしぐ七の拵ハ
京さんと吸白ゆる言ひぐゆく紙を歌ゆハ何と申乃
小数くとゆ〳〵ぐる尚産を何ゆう言ひ行らさんと
万〳〵それハ子アゥ何サ。アノ昨日客を〳〵よ来ゆい客ぐ

まて〳〵住とのゴヨ〳〵それハ此煙草の丁首ハ
暖まりがあるがお前今けきせるで莨でもおのこのら
万〳〵十二私〳〵やア呑ハ為るのヨ〳〵それまて何故丁首
ぶ暖く為て居るのゴ〳〵と言れて〳〵よく困り〳〵
万〳〵十二子文ハ今お前が莨を呑ごらうと思つて私が火
鉢の火を吹煙草で堀こうと文ぶ暖く為てゐる
のゴヨ〳〵ヤアマアお前もわるい人さのねぐちんな
ものを言ふ者があるものうそ今ゐも取ふ朱ゐもつこ時

ふるのうそ何故〳〵大ごふ仕事こ為ゐ。そして
のお方や私ハ達とお前ふ言つてきせるゆゑ言うそ
そこへちよんとお居りト言て〳〵お方ハ何とやう祇
状ふのきこ言うく為る〳〵お釈の例さ〳〵どう
やう言ゐあく怖くあゞ〳〵奇怪ゞ無ハ呉さ〳〵
ぬ目を涙ふいつゞ驚こせて〳〵コレハ方や今新言て
言つく笑ゐも釈の身でハ恥うのが私ハ基大坂の
浦の内とのふ所ゞ芸子を〳〵居こ考ごのふと

しとうさる大家のあらうとまゝ見ひよ深く来ハ夫婦ニ
孕ゝ産婦ゝ子ハ前ごゝ嵐を若且那の
が稼くと家を付てお暇ごけをどもいお家ハ大金のもち
でもまゞ貧住ぐ、お車ごうゝ私の體を清出して他へ
住居を持せやうと云ふ事もあるこの後ごうゝ
おまへを乳のある所へ置ておくと云ふ事あつて私ハ乳ぶり養子者
の乗をゝく居るうち或家のあるじ若且那が宅

ふ見せがゝしの衣装ぐ私の所へ来て仕事
身も見まぐ所へ永く通つてくれ方とゝ
子まで出来さわぐうゝ家ハ一年目ごうゝ身体
をゝく乗ふさせてくゝ考らうと思つて居ふ後母
と出所のそうゝひぐ代身ふ業へもわへ乗まで乗られ
ゝうゝ今歌濱金を二拾両業つて勘当さて
うゝ迎も外嘆が悪ふて生地実居ゝ実ぐ寧の乗
強金へ住つて一高乗やつて見やうと思ふうゝ自前ハ

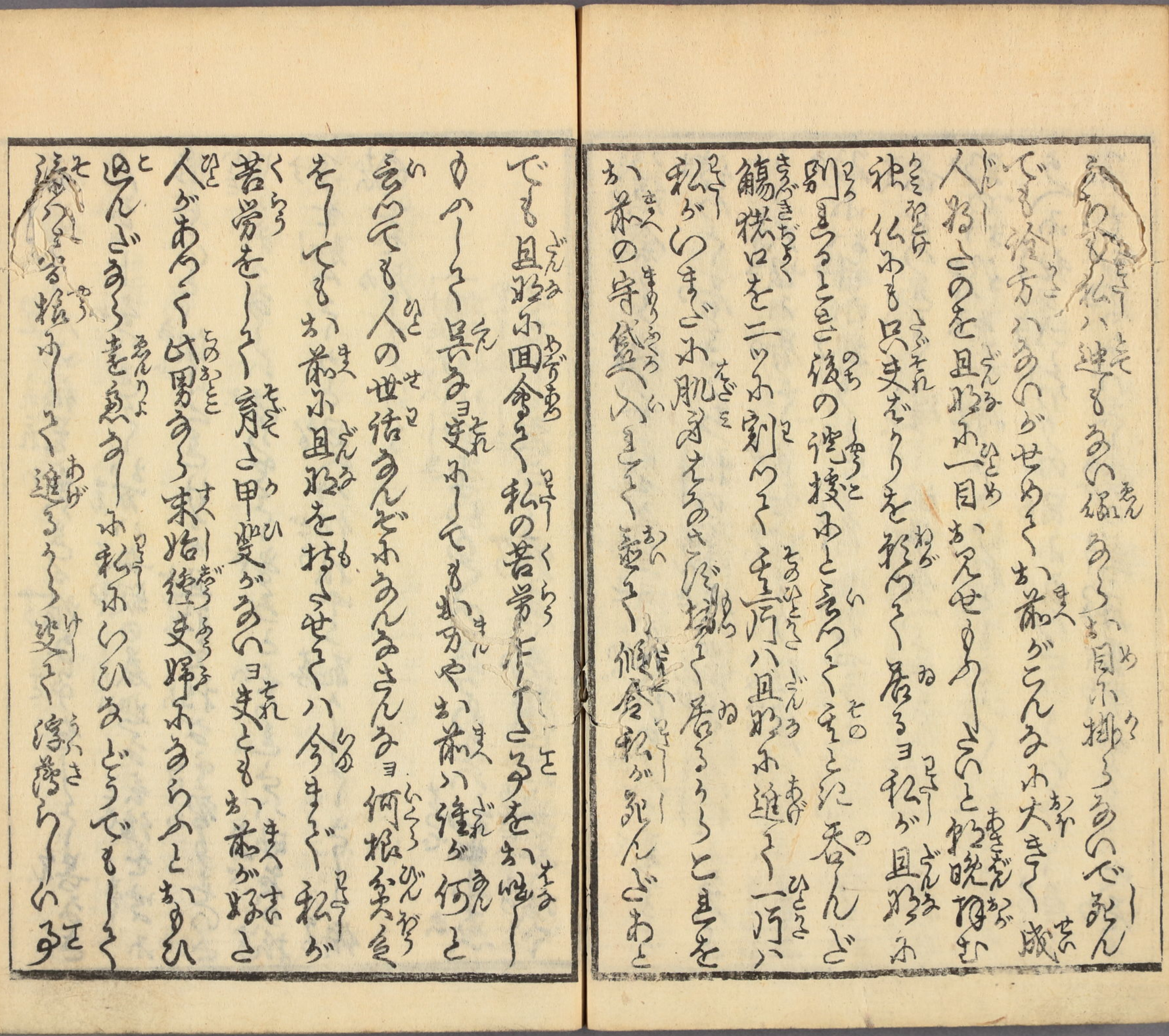
随分商賣が精を出して
どうでもして育て呉うと思
うて孫金（ばあさま）に成るやうが出るうと
うう金を十出して呉ハあんまり空いけとても那
児を育てる何でも呉ふるく呉ると言れと時
の私が思しきホンニ死んでも仕ひさいやうであつと
けまどもあんまり私が淳こうう呉且那の言ふ未練
が出やうくと感とを励まして居る時分十
あこらくく
あの金ふ私の髪飾を拵へて別ふ十あこらくく
拾合世あの金を呉且那の恵へ私ハ形ふ勧め
をしく居てもお方ひとりハどうでもなるて育ちやう
交くたんみをを苦労ふあるこうのいで孫金へ住く
一商賣をうう氏金をも元をとやうの呉しふるて
仕さひまと思理ふを金を拵せく進さう私の
志ぎを賜いと言つく泪をこぼくい取りぐろ
はが夫が一生の別を不あらうとハあが付あんごヨト

泣つくとゞめを涙流いと哀れなぞ尺へかける

第九二回

楽下い方ハ是未方の長俳りを聞くうちも黄い
泣しく居うりが方へそれゞやア私のお兼さんハ上
方うう強金へ仕くと云うく如アお別きて切り役りの日
ものうへ毎ア文ぐうう目の浅まるわど若労を為
六子文ううアやなよ生差異がお別まくうう
私ハ方ぢり養子をしく九三年とゝのもの今日

ハ強金うう使りがあるう翌日か使ひの人が来うと
待つく居るうち私の年紀が明くなる程お別あつと
う大坂ハ居く妻を捨ちり強金へ行つく差且
別ハ方ハ別ハ掛り老も解もかうと三知ハるお
前をつまく遍く式強金へ来く種くと差且
別のお別来を尋ねさけれどもとく知まのを
うへハ私が式りの見ハあつうのよく尋る
知も来るいぐ長の年月苦労ぢりく居る



私ハ迷ふ網ばかりの目ばかりのでもしん
でも後方ハのびせめて御前が一人前
人前とのを且那ふ一目おんせもあつさのと朝晩ばかり
仏ゆも只夫ばかりを祈つて居るヨ私が且那ふ
別まるとき後の後接ふと言つて生こと呑んど
鯨様口を二つふ別つて生ハ且那ふ逃げて一所ハ
私がいまごゆ肌ふ生るのさびしくて居るうと且を
お前の守護人まで御食私が死んどあと

でも且那ふ回命ばかり私の苦労ばかりをお嘆
ゆふ〜〜異ヨ夫ゆ〜〜ばかりやお前ハ後が何と
言つても人の世話ぞふんぞふんぞふんぞヨ何根矣
をしてもお前ふ且那を持せてハ今まで私が
苦労をしてこの甲斐がのヨ夫ともお前が好と
人があつて世男ばかり未始後夫婦ふあらふとおひ
四んどうを意ゆ〜ふ私ふひみどうでもしく
流ばかり嘆ふ〜〜逃げるうと変て涙ばらいる

老男人ハ彼是云フ程ニ拍子ヲ〳〵吾ガ
ンヌヨト云フ〳〵方ハ母親ノ悪巧ヲ云話ヲ聞ク
法ケノ上デ涙ヲ流シケルガ且那ヲ持タ事ヲ喜リ
男ガアル〳〵バ流セ〳〵キロト云フ時ハ眼前ノ拍
子ヲ知ラウト思ヘバ何程中ヲ取ラ〳〵サ〳〵俯
向テモ居タリケル

隅田川四季ノ眺ノ初学ノ意
方梅屋敷ニ〳〵別レヲ惜ム

川風ノ眠リ覚ヲ夏ノ紅葉八七
第二変ノ所

ト中言ヲ〳〵唄ヲ延紅ガ拍子ヲ考リカ〳〵
思ヒ切ル〳〵三味ノ船ヲ〳〵居ル所ハ表ノ格子ヲ
ヲ叩ク〳〵ヨ和さん誰ト云ヒ乗ウト云ヒ内ノ
ヨヤ若ん和ねこ〳〵ヨヤ若且那ノ紅
きゝヤ宅ヲ滝〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ和ご
ヲ子何時ハ〳〵ヲ〳〵ヲ郷ヲ声ゴゼ

時〳〵ぐらせて〳〵お茶でもこーらへさせるのうへ遠へ
わ〳〵トキニハお紙さん何でも呑めそうな物を言ひなはれ
て呉もへ何のかるまもうこ子ニ系へあんでもいやアる
も〳〵それどやア雑と豆子と牛蒡わでもるまもうこ系へ
何の系こ〳〵も〳〵ものゴョ為うこ言つてもいま茶えん
ハ宮ホ素通の子ニ私が叶るお方壌のるを考浪おえ
ものもとと豆子ホ映ホるわ入まこ〳〵い仕舞ものもう
こ子系一ナニ叶身アそんなきハるうこけこども実ホホ

思儀な沈ぐい赤のお世話ホまぐるるもつ多へアレ
そんなホ云決を多さるものゴも冥ハ子ホ〳〵ドレ姉
どやアお身を云付こ来るうこもうちホ那壌が来さ
ら通例の通り二階へ子いうこ系へ和紙こ多へあア。コア
コぶ必こ呆ニるぐらうホ〳〵トこハるぐ〳〵出こ行くと
入遠へこ〳〵お方が跡先を見まこ〳〵るぐ〳〵延紙の住居へ幸
度迄入り方へお師匠さん。ヨヤハるナお母さうへトこホ声必いこ
系ニ系ハ屏風の陰へちよいと隠ニるをい方ハ支とる家が

三十一箱
基輝山

つゞき中仕切の障子を明け火鉢の側へ居りゐる
ら猫鼠をホット注のく方へ京さんもてへげへごゝウ那
程今見まるとい方ひごゝ先刻ゝゝ注居を外
〳〵是で三度まるのふまごゝ出ごゝゐのそうごゝョ何
に知ふ何をゝ〳〵ち在ごゝ人の家も知らゐのごゝ考ゝぐ
考まゝ〳〵ョト猫りゝを引ひごゝ鶯ゆゝ猫の下
を捲ゝ居る所を見をゝて京三郎ハ卒度屏風
の陰より立出ゐを伸〳〵後ゝ方の眼を考ら

ゝり押ゝるとお方ハ泣ゝ〳〵方アレエ川ト言ひゐごゝ
男の顔を撫摩ひ後ろを指向ゝ京三郎と新兄合
せ方ヲヤ京さんゝ〳〵の私家アの義さんと知ら
ぜどんゐふ泣りるまゝ〳〵さらゝ。ア婦ゝゝと言ひつ
初ゝ完示考ハ京丈ごやア他の情男ごと思ゝ焼〳〵
ゝゝ知ゞ新をゝゝゝ〳〵ひ身ごゝゝ考知ゝ婦ヒの
のゝ方アレまゝそんゐゐを言ゝゝまゝごゝョ私ハ
そんゐ情男ゐんぞゞ行知ハあるゝサア丈を紹介まゝ

トはが〜流ぐんぐらの糸「八〜何もそんあふ三まふ
あつて後を立てるゆもねくいるか「それぐらく〜お前さん
もあんまり思ひ切りがよいぐやアあいろヨ私きもアお前
そんのおもぐ逢いたく〜富ふ言を捨て見ぐ三度と
ふすの住居を捜出すく〜まんぐありまセヨそん
あふ思つて居るものを忘ることア可嫌そうぐと思つて
お呉なさいまセヨト実情あるふを聞き物まきる
糸三郎ふ涙更ねとなく居さりける

元見より後幾程もなくお方が母ハ風邪の気
地となく却せ〜が次第〜ふまくなりて
終ふたるなくなりしかば糸三郎のそうふひ
代ふ知已もあるぐされば皆糸三郎のそうふひ
ゆく唯辺の選りも為果〜ぐお私ハ約ふ役価
あれバ実より八方を我家ふ陰と取り糸三郎ふ
稼ぐと大くの世をひらけく〜そなの面得
ふるさり〜ぐ糸三郎ハ加あつて姑く田舎へ

いつゝ留守ゐ小方ハ私ハ幾久増をしてお方
を婦美川の唄女とせ〜より名をゞ小方と
改め〜ゞ又右あつこ婦美川より小川の姉
〜仕舞〜とゝり又ハ方ゞ母ゞ後の跡拠とて
濃り〜る猶口の所割ゆく親子の名告を
もるや吾ハ開ハ又編ハいつて委しくるゞ

春色傳家の花巻之十一了